

## 黒猫と

「どうした？」

「またおりてこなくなっちゃった...」

「またか...」

思わずため息をつく。

子供達に手を引かれて、たどり着いたのは公園。

その一本の木に子供達が集まって見上げている。

「さんご」

木の上にいる姿を確認して、声をかける。

一声鳴いてから、こちらをじっと見つめてくる金色の瞳。

「ちがうよ～。くろさんごだって。」

「ちゃんとなまえよんであげなきゃ、かわいそうだよ」

「...黒珊瑚？」

ふと公園に座っていたあの音楽家が興味を示してやってきた。

まだ幼い子供達にとっては、あまり年齢とか貴族とか関係ないらしい。

警戒心もなく親しげに話しかけている。

「うん、黒くて綺麗なんだよ～。」

だから、くろさんごという名前をつけたと嬉しそうな子供達。

「でもね、オルフェがよばないとおりてきてくれないの～」

子供達が会話している間に、手を差し出して、名前を呼んでやる。

呼ばれるのを待っていたかのように、飛び降りてきた。

「飼ってるの？」

「そんなわけないだろ。」

地面に下ろそうとすると、嫌がって爪を立てる。

引き離して地面に下ろすけれど...足元に擦り寄ってくる。

「でも、ずいぶん懐いてるよ」

「こいつが子猫のとき、木に登って下りられないときにおろしてやったことがあるから、

そのせいだ。」

分かったような分かってないような顔で相槌をうってくる。

何か言おうと思ったけれど、子供達が俺を呼んで遊んでほしそうにしてるのでやめた。

...あのときのお礼とか言うべきだろうかとか迷ったけれど...

特に何かを言う必要もなく、ただこうしているだけで良いと思った。